

内村鑑三 闘いの軌跡(八)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzō (Part 8)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第八章 文筆家内村鑑三の誕生

一 二つの英文著作

文筆家として生きる

京都時代の内村鑑三の生活は、「不遇」の二文字によって象徴的に示されるものがあつた。彼は貧苦と、そこから来る自尊心の損傷にいたく悩む。その一端は、前章で詳説した『求安録』に読むことが出来る。貧苦からの解放、——そのためにはなんらかの形で収入が、自身はもとより父母と弟妹、それに妻しずと長女ルツを養うためにはどうしても必要であつた。彼はそれを執筆活動に見出して

いく。『基督信徒の慰』『求安録』『貞操美談路得記』、それに英文の *Japan and the Japanese* & *How I became a Christian* の二つの著作がまとめられ、『地人論』(のちに『地理学考』と改題)『後世への最大遺物』などもまとまつた。彼は文筆家として生きようとした。

ここで、当時鑑三が書いた二つの英文による著作について触れておこう。鑑三は一八九二(明治二五)年二月五日刊行の *The Japan Daily Mail* に "Japan's future as conceived by a Japanese" と題した論文を載せる。のち、タイトルは Representative Men of Japan と改題されるが、この方が内容によりふさわしいと考えたためであろう。と同時に、すでに何人もの先人が指摘するように、鑑三の愛読したアメリカの思想家エマーソン (Ralph Waldo Emerson) の Representative Men (『代表的人物論』もしくは『代表的人間像』と訳される) や、イギリスの歴史家カーライル (Thomas Carlyle) の *Heroes and Hero-Worship*

〔英雄および英雄崇拜〕に影響されての改題と考えられる。この論文は二ヶ月後の四月、『六合雜誌』に日本語で「日本の天職」と題されて載ることになる。

「日本の天職」は他の文章をも含めて *Japan and the Japanese* のタイトルで一八九四（明治二七）年十一月二十四日、民友社から刊行された書物にも入る。民友社からの刊行は、徳富蘇峰との縁による。この本には西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮上人の五人の評伝も収められた。鑑三は日本や日本人の長所をアメリカ留学中に再発見し、何かとアメリカ人に伝えており、帰国後もそのことを怠らなかつた。

この年（一八九四）一月二十七日付で京都からアメリカのD・C・ベルに出した便りの一節には、「最近我国の偉人の伝記を読んできますが、その中の幾人かは実に偉大であり、クリスチャンと呼ばれる多くの人よりはるかに偉大であり——英雄的で、慈悲深く、誠実で、真摯です。私はズット以前から、彼らを異教徒とか、神に棄てられし徒とか呼ぶことを差し控えて来ました。私は思います。異教徒を「哀れむ」ところのクリスチャンたちは、少しく自分で自分を哀れまんがために「異教徒」の偉人について大いに学ばねばならぬ」（山本泰次郎訳）とあり、その辺の事情がうかがえる。

西郷隆盛

Japan and the Japanese は、改版に際し、いくつもの文章を省き、*Representative Men of Japan* と改題され、警醒社書店から一九〇八（明治四二）年四月二十九日に刊行された。代表的な日本人五人にしばった本にしたのである。そしてタイトルの邦訳名は、『代表的日

本人』となる。この題名は、鑑三の命名であった。ドイツ語版の表紙にドイツ語と共に鑑三自筆と思われる筆による文字〈内村鑑三著／代表的日本人〉の文字が見出せることからしても、そのことは言えるのである。また、鑑三がその「日記」などでも、しばしばこの本を指すことばに『代表的日本人』を用いていることからしても、この訳語が定着している。

今日『代表的日本人』は、いくつもの訳文が存在する。岩波文庫には一九四一（昭和一六）年九月二十日第一刷の鈴木俊郎訳と、一九九五（平成七）年七月十七日第一刷の鈴木範久訳とがある。前者の文体は常体で、旧字体・旧かな使用、漢字の使用が多い。後者は話術体で、新字体・現代仮名遣いで、漢字は少なく、難しいと思われるものには、ルビが施されている。訳者注は前者が二ページなのに對し、後者は十ページと五倍に及ぶ。それぞれに特色があり、その優劣を論じるのは無意味であるが、後者が新たな新字体世代を意識していることは、確かである。そこで以下、鈴木範久訳によって本書を見ていこう。

『代表的日本人』には、前述のように五人の日本人の先覚者が採り上げられているが、巻頭の西郷隆盛と巻末の日蓮上人の項が特によい。そこで以下、この二つの項に光を当てることにする。西郷隆盛には「新日本の創設者」が、日蓮上人には「仏僧」のサブタイトルが添えられている。

鑑三は大西郷を共感をもって論じる。その生い立ちから城山での死に至るまでを、手持ちの資料を基に、彼の偉大さを語るのである。「一八六八年の日本の維新」にはじまり、「2 誕生、教育、啓示」
「3 維新革命における役割」
「4 朝鮮問題」
「5 謀反人としての西

郷」「6 生活と人生観」に至る6章は、間然する所がない。そこには自身の生い立ちから、希望に満ちた札幌農学校時代、その後の苦闘の人生、——離婚・留学・北越学館事件、さらには不敬事件から泰西学館での不快な待遇など、自身の体験したやり切れない思いが重ねられているかのように見える。内村鑑三にとって西郷隆盛は、決して過去の人ではなかった。西郷の死は一八七七(明治一〇)年九月二十四日、鑑三が札幌農学校に第二期生として入学した年と重なる、それは十六歳のことであった。西郷は鑑三にとって決して過去の人ではなく、同時代人であったのだ。

鑑三は西郷の死を惜しみ、「もっとも偉大な人物が世を去りましたが、最後のサムライであったのではないかと思われます」と書く。自身佐幕派の没落士族の子として生まれ、誇り高い精神をもって生き抜くことから来る軋轢・苦闘の生活を、西郷隆盛の悲劇の生き方によってカタルシスしているかの感すらある。西郷は時代の転換期に矛盾を負って格闘し、如何なる道がよいかを探しながら滅んだ。鑑三はそこに目をとめ、共感を持ってこの人物を描く。現代の批評家若松英輔は、その著『内村鑑三 代表的日本人 永遠の今を生きる者たち』(NHK出版、二〇一七・一〇)で、次のようにまとめる。

西郷は、明治維新の立役者でしたが、明治維新が抱える問題や矛盾を一身に背負って、西南戦争で亡くなっていきます。維新に関わった多くの人が最終目標としていたところは、西郷にとつて始まりにすぎませんでした。多くの人が、あることを成し遂げた、と感じていた場所こそが西郷の出発点だったので

そうした認識をもつ人間が、明治政府を動かしている人々と一緒に仕事をすることはできません。内村も西郷と同様に、明治維新に対して懐疑的な見方をしていました。日本にとって明治維新はとても大事ではあったけれども、未熟なまま邁進しているのではないか。明治政府は西欧列強に肩を並べようとして、近代化を進めてきた。目に見える文明としては追いついたとしても、心や精神の問題は深化したのか。あまりに物質的な面を重視してきたために、存在の深みを見つめることを忘れてしまったのが明治という時代ではなかったか——というのが内村の考えだったので。

この指摘は正しい。ここに至って、わたしたちは夏目漱石の「現代日本の開化」(『朝日講演集』大阪朝日新聞社、一九一・一一)にも通じるものを、見出すこともできよう。

鑑三は「西郷の偉大さはクロムウエルに似ていて、ただピューリタンズムがないためにピューリタンといえないにすぎないと思われます」と言う。結びの「西郷には、純粹の意志力との関係が深く、道徳的な偉大さがあります。それは最高の偉大さであります」には、西郷隆盛に日本人の典型を見、外国人に示そうとする内村鑑三の強い共感がにじみ出ている。

日蓮上人

次に、本書『代表的日本人』の巻末に置かれた「日蓮上人―仏僧」は、「1 日本の仏教」「2 生誕と出家」「3 暗黒の内と外」「4 宣言」「5 ひとり世に抗す」「6 剣難と流罪」「7 最後の日々」「8

人物評」の8章から成る。鑑三はまず「日本の仏教」の説明にはじまり、次に日蓮の「生誕と出家」を論じる。「安房の国の東端、岬に近い小湊村の漁師の家」に生まれた善日磨（のちの日蓮）が、「信心深い両親の考え」で僧侶となる。なぜ僧侶の道を選んだのか、鑑三は「きびしい社会差別のあった時代に、宗教の道は、低い身分に生まれた天才が、世に自分を存在を示しうる唯一の道」と書く。そして「3 暗黒の内と外」で鑑三は、蓮長となつたのちの日蓮が最初に直面した課題は、「仏教に無数の教派の存在する問題でした」と言う。

この課題は、鑑三自身が札幌農学校時代の教会生活にはじまり、アメリカでの体験や帰国後の生活で、絶えず直面したキリスト教プロテスタントの現実問題でもあった。鑑三は教派問題に苦しみ、自ら無教会主義を唱えることになるのだが、若き日の日蓮が直面した課題もここにあったとする。鑑三は自身に重ねて日蓮を論じているかのようだ。

鑑三は教派問題、特に外国宣教師の問題には、心底苦しんできた。彼の日蓮に寄せる共感の一つは、教派問題に悩み、闘いに明け暮れた、その姿にあったと言えよう。彼は「3 暗黒の内と外」で次のように書く。

これが、蓮長の抱いた最初にして最大の疑問でありました。きわめて当然の疑問であります。私どもも、同じような疑問を、仏教にも他の宗教に対しても抱きました。同じ悩みをかかえた、わが主人公に深く同情できるのであります。その疑問は、蓮長の寺の住職も、他のだれも解いてはくれませんでした。い

きおい蓮長は、ひたすら祈りのみに明け暮れるようになりました。

再び言う。鑑三は自身を蓮長に重ねて、この文章を書いている。彼は言う。「蓮長は、独力でもってあらゆる権力と抗し、当時勢力を有した宗派とは全然別の思想をひっさげて立つたのでした。その後の日本に蓮長にならぶ僧侶は出ていません」と。

鑑三の筆は、日蓮の不遇な生涯を誠実に描く。比叡山における十年の修業。その結果は、「今や、あらゆる経典にまさって法華經のすぐれていること、それが叡山の開祖最澄により、原型のまま日本にもたらされたこと、しかし、その後、叡山の僧侶により、価値を低くみられてきたこと」や、その後の法難が述べられる。日蓮の『立正安国論』は、彼の闘いが生んだ「闘いの声」であり、「決然とした宣戦布告」であったとする。「竜の口の法難」を免れた日蓮は、左渡に流刑される。彼が五年もの流刑を生き延びたのは、「肉体に対する心の、力に対する霊の勝利」と鑑三は書く。

「8 人物評」は、鑑三の日蓮に寄せる並々ならぬ理解度を示すものだ。彼は「本論の対象としている人物ほど謎にみちた人物が、わが歴史に現れたことはありません」とし、以下のように言う。

敵にとつて日蓮は、冒瀆者、偽善者、私腹をこやす者、山師などでした。日蓮のいかかわしさを証明する本が書かれ、そのなかには実に巧妙に書かれたものもあります。日蓮は、仏教がその敵に嘲られるときの恰好の攻撃的でした。日蓮は、自宗を除き、同じ仏教徒たちにより、仏教が受ける非難のすべてを

になうスケープ・ゴート(注、いけにえ)にさせられたのであり
ました。日本では日蓮のように、非難中傷を山ほどあびせられ
た人はいません。

鑑三はこう書きながら、一方で「しんそこ誠実な人間、もつとも
正直な人間、日本人のなかで、このうえなく勇敢な人間であります」
と日蓮を称え、高く評価するのであった。

Representative Men of Japan 収められた他の三人、——上杉鷹
山・二宮尊徳・中江藤樹に対する鑑三の見解も、これまたユニーク
である。鑑三は外国人に日本のティピカルな五人の人物を紹介しよ
うと本書を英文で書いたのである。

How I became a Christian

この『How I became a Christian』は『Representative Men of
Japan』より先に出来上がっていたが、刊行は逆になった。鑑三は当
初アメリカでの出版を希望し、D・C・ベルに斡旋を依頼したが、
原稿は返却され、なかなか日の目を見なかった。鑑三はしびれを切
らして、東京の警醒社書店に自身の書いた英語での刊行を依頼す
る。それが日本における初版(一八九五・五・一〇刊)であった。ア
メリカ版の方は、いろいろ困難があったもののフレミング・ド・レ
ベル社から『The Diary of a Japanese Convert』のタイトルで刊行さ
れた。一八九五(明治二八)年十一月のことである。続いてドイツ
語や北欧諸国語にも翻訳されている。鑑三自身にこの辺のことを
語った講演(日本組合基督教会天満教会、一九〇六・一一・一八)を基と
した文章がある。今となつては、自著に対する著者自身の証言とし

て極めて貴重なので、前半部分を次に引用する。

○是れは余が曾て余の信仰の経歴を外国人に示さんとて余の拙
き英文を以て綴りし小著述の題号である、此書世に出てより英
米宣教師の多くの笑ひを買ひ、横浜在留の英国宣教師某の如き
は其英文の奇異なるを示さんがために戯れに其数十部を購ひて
之を其本国の友人に送りしとのことである、其、米国に於て出
版さるゝや、三四年を経て漸く五百部を売尽くすを得しのみ、
又英国に於てはロンドンに於ても、エチンバラに於ても一軒の
書店の其出版を引受けんとする者がなかつた、余は英文を以て
此書を書いて英米両国人の嘲笑を買ふに過ぎなかつた、彼等は
唯余の英文を笑つた、爾うして余の精神の在る所には少しも眼
を留めなかつた、唯一「紐育ネーション」なる一文学雑誌が之
に多大の同情を表し、之を宗教以外に価値ある書として其読者
に紹介して呉れたのを記憶する。

○然るに此小著述が独逸人の目に触れて大に欧州人の歓迎する
所となつた、其独逸訳は英書独訳を以て名を知られたるチュ
ーピング市のエーレル嬢の筆に成つた、爾うしてストガード
市に於て出版さるゝや、独逸、墺地利、瑞西等、独逸語の行渡
る所に於て読まれた、数多き同情の手紙は余の手に達した、余
は思はずも、歐洲大陸に於て多くの善き信仰の友を得た。

此小著述は独逸より露西亞に渡つた、而かも日露戦争最中、
露国の基督教徒と余との間に親しき信仰の手紙が交換されたとい
ふ次第である、終に此書は露領芬蘭土にまで行渉つた、爾う
して其処にソルタバラス市高等師範学校教授スオマライネン氏の

筆に由て芬蘭土語に翻訳された、爾う斯^こうする中に瑞典語の翻訳が出た、爾うして今や又丁瑪^{デンマール}訳が出てつゝある、独逸に於てはベルネツケ博士の批評を辱^{かたじけな}ふした、ベテックス教授の愛読の栄を得た、余は余の精神的友人を英米人の中に得る能はずして、之を欧州人の中に得た、而かも壤地利に於ての如きは其天主教信者の中に得た、是れ実に奇異なる現象である。

無名の一クリスチャン内村鑑三の半生の記は、そうたやすく英米人に受け入れられるものではなかったことがよく分かる。が、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』は、その体験した前半生のことどもを客観化して書いた勝れた信仰告白に立った自叙伝であった。ヨーロッパでは早くから自伝というジャンルは確立していたが、日本ではまだ近代的な立場からの自伝のなかった時代である。小原信はこれまでもしばしば引用した『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』で、「福澤諭吉の『福翁自伝』の刊行が明治三十一（一八九八）年であることを思うと、鑑三の自伝は諭吉より少しく先に出たことになる」ことを指摘するが、大事な視点と言えよう。

『福翁自伝』は、『フランクリン自伝』の影響を多分に受けていたことが指摘されているが、鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』は、副題に *Out of my Diary* とあるように、生い立ちから留学生活を経て日本に帰国するまでの前半生を、自らの日記を基として率直に書いたものだ。それでも自伝として今日までその輝きを失わないのは、客観視された人物の回心が、開花期日本の時代と共にしっかりと捉えられているからだ。

もつとも、右に引用した講演で鑑三自身が言うように、『余はい

かにしてキリスト信徒となりしか』は「拙き英文を以て綴りし小著述」なのである。ネイティブでない人間の書いた文章が、文章上多少の批判を受けても致し方ない。先に英文で刊行された *Japan and the Japanese* にしても、刊行直後 *The Japan Weekly Mail* (一八九四・一二・一五) が、その英文の未熟さを指摘していた。

日本文学研究が外国人によってなされるようになった二十一世紀の今日、わたしは外国人が日本語で書いた論文（特に芥川龍之介にかわるもの）を見る機会がよくあるが、発想はよくとも、日本語として未熟な文章にしばしば出会う。そうした折りに痛感するのは、最終段階では、やはり日本語に熟練した日本人に見てもらうことの必要性である。鑑三の場合も同様だったのである。いかに英文に練達していたといっても、しょせんは英米人との交流の少なかつた時代の日本に生まれ、二十代半ばまでを母国に過ごした人の書いた英文である。 *The Japan Weekly Mail* の書評が、「どうして外国人に見てもらわなかったのか」と書いたのも、わたしの体験からしても、もつともなことなのである。

世界的に注目された書

英文『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』の警醒社書店版初版表紙と本文は、現在『内村鑑三全集3』に収録されているので容易に見ることが出来る。タイトルは *HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY* となっている。半年後シカゴのフレミング・ド・レベル社からこれを原典としたアメリカ版が出るが、そのタイトルは *The Diary of a Japanese Convert* である。その際には、右の内村全集の「改題」によると、「若干の箇所

センテンス全体にわたる本文の変更が行われている。ただし、誰がこれらの変更を行ったのか、内村鑑三自身か、D・C・ベルその他の人かは明らかでない」とある。とにかくアメリカ版が契機となつて、ドイツ語・フィンランド語・デンマーク語が続ぎ、HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY は、世界的に注目される書籍となつていくのであつた。

この本は、現在日本では『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』のタイトルで、流布している。訳本はいくつかあるものの、わたしは初めて手にしたのが、山本泰次郎・内村美代子訳であつたので、本論でもこの訳書を用いている。現代表記による解りやすい翻訳に特色がある。

京都時代に鑑三は以上に見てきたように多くの著作をものした。が、その文章には、やたらと傍点が多く、時に煩瑣さを感じる。傍点は一般的には右に付けるものだが、鑑三の文章では左につくケースもあつて、読みづらい。また、句読点、特に読点が少ない。そこで本論では傍点が必要最小限とし、句読点はそのまま、鑑三の文章を引用している。研究者の中にはこうした引用を否定する人がいるかも知れないが、忠実に引用された文章での内村論は、現代の読書体験からすると読みにくい。左に付された傍点をはずしても、十分その趣旨は把握できる。かえつて理解しやすくなる。むしろ時に、もつとその部分を確認したいケースがあるならば、全集を見て貰えばよいのである。

貧困と闘い、不敬事件や泰西学館での給与上の不当な扱いなど、やり切れない想ひは、内村鑑三の書くことのエネルギに転化していった。人はよき待遇と環境が与えられても、よい仕事ができるとは

限らない。鑑三は京都時代、不遇を逆手に取つて書くことに集中した。それは神より与えられた恵みと解されよう。もし彼が不敬事件を起こさず、第一高等中学校(のちの第一高等学校)の教員としてずっと在籍したとしたら、後年、一高の名物教授、さらには日本の最高学府の自然科学の教授となれたかも知れない。けれども、近代日本の思想史・精神史に名を留める人物に、さらには第二次世界大戦後の日本のリーダーとなるような人々を多数育てる存在とは、決してなれなかつたであらう。鑑三は不敬事件や京都時代の不遇な生活、つまり、若き日のきびしい神の試練があつて、はじめて輝き得たのである。不敬事件とその後の経済的な苦しい試練なくば、彼は聖書熟読による深い思想や、そこから来る行動によって、後年、日本ばかりか、韓国その他のアジア諸国、それに欧米諸国にも崇拜者を持つ思想家とは、決して成り得なかつたであらう。

二 『萬朝報』英文欄と『国民之友』

独歩と鑑三のその後

鑑三には人を惹きつける何物かがあつた。貧窮の極みにあつた京都時代にも彼を慕う文学青年は多かつた。前章で少し述べた国木田独歩も、その一人である。前述したように、独歩は東京専門学校在学中の一八九一(明治二四)年一月四日、植村正久の牧会する一番町教会(のちの富士見町教会)で植村から受洗していた。その彼が内村鑑三に魅せられたのは、京都時代の鑑三が極貧の中で、生活のため次々とまとめた書物の力にあつた。

これまで書いてきたように、鑑三が京都時代に刊行した『基督信

徒の慰』をはじめとする文章には、人を納得させ、人に力を与えるものがあつた。二十代後半から三十代前半にかけての鑑三の文章は、格調高く、力があつた。それに加えて、彼は不敬事件で一時、時の人となり、知名度は抜群と言つてよかつた。当時、悩みを抱えた青年の心に、鑑三の文章は、魅力あるものとして凍み込んだのである。

独歩は鑑三の『流竄録』や『地理学考』や『HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY』を読んで、いたく感銘する。彼は一八九二(明治二五)年十一月、佐々木信子と徳富蘇峰の媒酌で結婚、翌年離婚という苦い体験をする。独歩は国民新聞社に勤め、日清戦争に際しては従軍記者も勤めた。そうした中で彼は内村鑑三の著作を読み、「書信の交」を結んだのであつた。日記や手紙は明治・大正・昭和の知識人には付きものの資料であるが、二人の精神的の交流は、それら残された文献に垣間見ることが出来る。独歩がはじめて鑑三と会うのは、手紙のやりとりがあつて後のことである。

独歩は信子の母佐々城豊寿(日本キリスト教婦人矯風会の幹事)から聞いた伊達藩の北海道開拓の話に惹かれ、結婚生活を北海道の山林にする夢を持ち始める。そうした中で、鑑三の『HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY』を読んだことで、彼の夢は大きくふくらみ、北海道の現地調査を思い立つ。それを鑑三に告げたらしく、これも前章でふれたことだが、一八九五(明治二八)年九月十九日、鑑三の新渡戸稲造宛の紹介状(英文、九月八日付)を持って単身札幌に行く。鑑三は外見の無骨な風姿に反して、意外と細やかで、親切なところがあつた。それは彼の弟子たちがしばしば語るところでもある。

なお、日本語でなく、英文の紹介状を書くところなども、いかに鑑三らしい。英文(『内村鑑三全集36』収録)の骨子を以下に意識して置こう。一 国木田哲夫という青年が君を訪ねるかも知れない。自分には彼に会つたことはないが、書いたものは読んだことがある。それからすると才能のある男に思える。彼は威海衛攻撃の際の従軍記者であり、以前は『国民之友』の編集を手伝っていた。少し君の意見を求めるだろうが、よろしくお願いしたい。わたしが彼のために君に頼みたいのは、彼の生活援助のようなものではなく、知的な面、精神的問題だ。君のことを北海道で会うだけのことはある唯一の人として勧めたことを許して欲しい。――

新渡戸は独歩の相談に乗り、親切な対応をしたようだ。この年(一八九五、明治二八)十一月十一日、独歩は植村正久の司式のもと、佐々木信子と結婚式を挙げる。が、翌年四月十二日、信子は失踪し、独歩は深い痛手を受ける。結果は離婚であつた。若き内村鑑三が体験した離婚という苦しみを、独歩も体験したことになる。独歩は鑑三がアメリカ留学で離婚の危機を乗り越えたことを知っており、自らもアメリカ行きを願い、如何すべきかを京都の鑑三に便りを出す。鑑三は四月二十九日付の返信を出す。

その全文を、独歩は一八九六(明治二九)年五月二日の日記(『欺かざるの記』後編、隆文館・佐久良書房、一九〇九・一、引用は学習研究社版『国木田独歩全集』第七巻、一九六五・六による)に書き留めている。いかに鑑三らしい心の籠もつたよき便りである。鑑三は未だ会つたことのない青年独歩の受けた試練に対し、「小生も早年の頃、貴君と同一の厄難に遭遇したれば」と独歩に同情し、「プロビデンス、プロビデンス、神に謝し給へ、神は貴君を普通人間以上となさんとすの聖

意なればなり」と含蓄ある理解を示す。「プロビデンス (providence)」とは英語で、日本語にするなら「神の意志」、「摂理」とでも、言つてよいであろう。その上で「御渡米の事は大賛成には御座候へ共彼の地に於て少くとも三四ヶ月間に耐ふる兵糧を用意するに非ざれば如何ともする能はざる事と存じ候」との忠告めいたことも告げる。

具体的には「貴君にして少くとも三百円位の資を整へらるゝならば小生は貴君が断然彼の地に到り、貴君の欲する学校に入る事を勧む。而して先づ教頭教師の信用を博し、然る後貴君の真情を打開き助力を乞ふを得べし。小生は他の方法を考へ付かず」との率直な見解を告げる。終わりに鑑三は「若し萬止むなくんば西京(注、京都)に來り給へ」と書く。独歩は東京で植村正久・富永徳磨・徳富蘇峰・横井時雄らにも、アメリカ行きを相談するが思うに任せず、京都の内村鑑三の許に会いに行く。独歩が鑑三に会うのは、この時が最初であつたようだ。鑑三は当時京都で世話になつていた義侠心に富む便利堂の主人中村弥左衛門に独歩を紹介、なにかと便宜を計つてもらふことになる。鑑三は未だ海のものとも山のものともつかない独歩の世話を誠心誠意行つた。

独歩の鑑三観

国木田独歩が京都に滞在したのは、この年(一八九六)の初夏、六月月上旬から八月下旬のことだ。独歩日記(「欺かざるの記」後篇)には、八月二十六日の夜、鑑三主催の送別会があつたとの記述がある。「明日、帰郷に決し、今日晩食に内村鑑三君主唱となりて富岡、横濱、中村の諸氏余のために送別会食を某楼に開かれ、鶏肉を飽食した

り。／便利堂夜学校の小僧連のために一場の離別の語をなしたり」とある。便利堂では夜学校を経営し、独歩を英語の教師として招き、僅かながら給与を払つていたらしい。当夜「便利堂夜学校の小僧連のために一場の離別の語をなしたり」とあるのは、出席した夜学校生徒への激励のことばであつたようだ。

京都滞在中の独歩は、鑑三としばしば京都御所を散歩したり、その家を訪問したりして、鑑三の日常生活と性格をも観察することとなる。不遇な時代を過ごしていた鑑三は、心にたまつた鬱憤を、年下のこの有能な青年にしばしば漏らした。独歩はもつぱら聞き役に徹したらしい。が、時にそこまで言わなくともと感じさせるような場面もあつて、それまで尊敬していた独歩の鑑三観は、微妙に揺らぐ。独歩の日記『欺かざるの記 後篇』には、次のような文面を見出す。

美はしき品性の人は実に稀なる哉。彼の人は一個の天才なり。されど其の品性は美ならず。其の品性は寧ろ下劣なり。其の精神は高尚なり。其の理想は高尚なり。されど其の品性は下劣なり。げに品性の中心は信義なる哉。彼は自己中心の横着者にして信義の人に非ず。彼の人は誰ぞや。内村氏なり。彼の人には品性の人を感化すべきものを有せず。彼の人には才あり文あり。されど其の人物に芳香なし。

これは三ヶ月近く、京都で鑑三を身近に見た独歩の率直な感想なのであろう。当時、不遇で、人生の闘いの最中にいた鑑三としては、十歳ほど年下の純情な青年に、鬱憤を晴らすかのように、人々の悪

口を言い募ったのであろう。このことは理解できないこともない。が、独歩は聞いていて、時にやり切れない思いにすらとらわれることもあった。偶像化してきた人物との訣別ともいえる記述だ。

その後の独歩は、何とか創作活動を続け、『武蔵野』『運命』『涛声』などの短編集をものしたものの、鑑三の紙上の教会（無教会主義）運動や再臨信仰にも接することもなく、肺結核で没した。一九〇八（明治四一）年六月二十三日のことで、満三十六歳の短い生であった。それはほぼ同時期に鑑三を慕い、近づき、鑑三の一言一句も聞き逃すまいとその後を追うことになる一八七九（明治一二）年生まれの正宗白鳥の当時の鑑三観とは、かなり異なるものがあつた。白鳥と鑑三のことは、この後にも折にふれ、述べることにしている。

名古屋英和学校に勤務する

内村鑑三が名古屋のミッシヨンスクール名古屋英和学校（現、名古屋学院）に、教師として勤めはじめるのは、一八九六（明治二九年九月のことである。独歩が帰郷して間もなくのことである。急に決まった話であつたらしい。鈴木範久の『内村鑑三日録1896』⁵⁴ 1896 後世へ残すもの』によると、『扶桑新聞』の同年九月一日の広告に、この学校の生徒募集が出ており、そこには「内村鑑三氏ヲ聘シ教授上一生面を開カントス」とあるとのことである。

名古屋英和学校は、メソヂスト系のミッシヨンスクールで、フレデリック・C・クラインによって愛知県初のキリスト教主義学校愛知英和学校（のち、名古屋英和学校と改称）として一八八七（明治二〇）年に創立された学校である。クラインは、キリスト教の伝道と英語教育を目的に、メソヂストの海外派遣宣教師として来日したので

あつた。鑑三はこの学校の二代目校長A・R・モルガンから交渉を受け、受諾することになる。この辺の事情は、一八九六（明治二九年九月七日付のアメリカのベル宛の便りに見ることができる。大事な書簡なので、煩を厭わず引用しよう。⁵⁵

も一つ重大なニュースがあります。私どもはここ一週間のうちに京都を引き払つて、東へ九十四マイル、人口二十万の名古屋へ移ります。目的は二つです。第一は、東京に非常に近くなるので、いつも東京で行われている私の出版事業にとり、断然有利なためです。第二は、アメリカのメソヂスト・プロテスタント教会の宣教師エイ・アル・モルガン師と思いがけず交渉を持つに至つたためです。同師と、師の二人の同僚とは、名古屋にある男子の学校を経営していますが、まだ何ら見るべき成績をあげていません。師は二週間前、私を訪問するだけの目的で当地へ来ました。師はノースカロライナ州出身の南部の人で、その祖父は大きな奴隷商人だったとのことですが、南部特有の率直さを多分に持つと同時に、ヤンキー族が不幸にも持ち合せていない多くのものを持つた人です。特に師はほとんど小児のような単純さと、「有名な宣教師の敵」「学校破り」等、等といわれる私に対する信任とをもつて、すっかり私をとらえてしまいました。その後交渉を重ね、また二度の特使の来訪により、私はついに名古屋市に赴いて居を定め、私の文筆労働の許す範囲内で、師の学校事業を助けようと決心しました。師は私に毎月七十円払ってくれるとのことですが、これは危機にある私の家計にとつては、実に大きな助けです。

内村鑑三の京都時代は、執筆活動に由って何とか維持されていた。しかし、前年六月、老いた両親と妹ヨシを京都に引き取つたこともあり、生活は苦しかった。書物は刊行された時は、なにかの印税が入るものの、定期収入ではない。また、印税収入は、さほど期待できない。彼は当時京都の理解ある便利堂書店の離れを借り、いくばくかの生活援助を受けていたものの、妻子と父母と妹を養うには十分ではなかった。それだけに七十円の月給はありがたい申し出であった。しかも、文筆家として生きるには東京に少しでも近い名古屋は、「私の出版事業にとり、断然有利」という事情もあったのだ。けれども、彼は以前の苦い体験からして、教育事業に骨を埋める気には、とてもなれなかった。それゆえ新たな職場である名古屋英和学校も、永久の職場とは決して思つてはいない。

とにかく、内村鑑三はこの年九月、名古屋英和学校教師としての生活をはじめのため、名古屋に移り住む。鑑三が短期間勤めたこの学校に関しては同年十月五日付で、平岩愼保（とく）に宛てた英文書簡（『内村鑑三全集36』収録）に、学校は小さく、生徒は二十五人であることなどを伝えている。また、十月十六日付でのアメリカD・C・ベル宛便りには、学校のスタッフと彼らが皆優秀なクリスチャンであることが報じられる。その上で、「こうしてパンとバターが保証され、月の終わり毎に、勘定書ににらめつけられるおそれもなくなりまして、著述の仕事に対する熱心もわいて来ました」とも書いている。すると名古屋英語学校は、居心地のよい職場であったことになる。

彼は文筆で立とうとしていたのである。学校経営にタッチするの

は、もうご免だ、文筆業、物書きという自由な仕事は、自分には一番合っているということが、彼には自覚されていた。けれども、彼は自身では求めなくとも、絶えず世の人々の注視の的にあつた。ベル宛の同年十二月十二日の便りで鑑三は、「自分では社会の評判になることを心からおそれているにもかかわらず、依然公衆の注目をあびているのです」と書いている。

名古屋英和学校では、一週にキリスト教証拠論（三時間）、倫理学（二時間）地理と歴史（十二時間）を受け持った（ベル宛書簡、一八九六・一〇・一六付）。圧倒的に多い科目は「地理と歴史」である。彼は自然科学はもとより、文学・哲学・宗教なども含めた社会科学の面をも含め、オールマイティーの力を有した教師であつた。彼はいま言う、社会科学の教師よろしく起ち振る舞う。しかしながら、鑑三の名古屋英和学院での教師生活は長くは続かず、翌一八九七（明治三〇）年一月までの、わずか五ヶ月に過ぎなかつた。この間の教員生活は、前任の熊本英和学校同様、学校運営に直接タッチしなかつただけに平穩であり、教育の喜びを彼にもたらした。

第八回基督教青年会夏期学校 正宗白鳥の鑑三回想

名古屋英和学校に就任する少し前の一八九六（明治二九）年七月七日～十七日、静岡県興津（現、静岡市清水区の一地区）の亀島楼で開かれた第八回基督教青年会夏期学校で、鑑三はカーライルに関する連続講演をする。夏期学校の講師には、鑑三のほか、平岩愼保・植村正久・松村介石・留岡幸助・江原素六らが講師として名を連ねていた。この夏期学校に出席して、鑑三の話に強く打たれた人物に、先に独歩の鑑三観にこと寄せて少し述べた後年の自然主義文学作家

の青年正宗白鳥がいた。

正宗白鳥は一八七九(明治一二)年三月三日、岡山県和気郡穂浪村(現、備前市)に生まれる。内村鑑三より十八歳ほど若い。正宗家は代々網元であり、白鳥は岡山山の薇陽学院で英語と聖書の勉強に明け暮れた後、一時故郷の穂浪村に戻り、塾居生活中に内村鑑三体験とも言ふべき時期を過ごしていた。その後、一八九六年二月に上京、東京専門学校(現、慶応義塾)の英語専修科に入学する。薇陽学院時代と塾居生活中の白鳥に関しては、磯佳和の『伝記考証若き日の正宗白鳥』に詳しい。上京後は、毎日曜日に植村正久の牧会する市ヶ谷の基督教講義所に出席するようになり、その年の夏休みに興津で「基督教青年会夏期学校」が開かれ、内村鑑三のカーライルに関する連続講演のあることを知る。

当時白鳥は健康を害していたが、帰省の途中、東海道線の清水で下車し、夏期学校に出席した。白鳥は『基督教信徒の慰』をはじめとする内村鑑三の著作にふれており、鑑三の訾咳に接し、教えを乞いたいと思っていたのである。白鳥後年の『内村鑑三 如何に生くべきか』⁸⁾には、微熱を推して出席した夏期学校の様子と、内村鑑三の風貌などを記しており、興味深い回想録となっている。さわりの部分を引用しよう。

私は明治二十九年二月に、学問修業のため上京した。上京後間もなく、神田の美土代町の基督教青年会館で、多年敬慕してゐた徳富蘇峰の演説を聴く事の出来たのを喜んだが、その年の夏には、興津で開催された基督教夏期学校に出席して、内村鑑三の連続講演『カーライル』を聴くことによつて、一層多くの

喜びを感じた。この時はじめて、その怪奇なる風貌に接したのであつた。私は上京後健康を害して、絶えず微熱があつて不快であり、暑中休暇を待ち焦れてゐたのであつたが、万難を排して帰郷の途上、興津に立ち寄つて一週間を費す決心をした。数十人の会員は数軒の旅館に分割宿泊することになつたが、私は最も下級の旅館に割り当てられた。講師と一部の会員は一流旅館の水口屋に宿泊してゐたので、私などは講師に接触する機会が少なかつた訳だ。しかし、予定の講義以外に茶話会があり、三保ノ松原や久能山への遠足があつたりして、講師に接触する事が出来た。

内村鑑三は七月八日の夏期学校二日目の「カーライルを学ぶの法」にはじまり、九日「カーライルの伝」、十日「カーライルの福音」、十五日「カーライルの宗教」、十六日「カーライルの事業」と五回の連続講義を行った。白鳥はこの夏期学校を通し、内村鑑三に傾倒することになる。右の回想記には、夏期学校の事務員から聞いた話として、「カーライルの講演は前年からの契約で、講演料は前払ひをしてゐて、内村はそれでカーライルの伝記などを外国から購入して研究していた」とか、「内村は他の講師とはちがつた毒舌家であつて、あたりかまはず、有名人の悪口を云つてゐた。殊に同志社の創立者新島襄の悪口を盛んに云つてゐるのが、私には意外に感ぜられた」と書く。

が、「そのために彼に対する敬意を失ふことはなかつた」とも言う。先の国木田独歩とはまったく違った鑑三観である。それは白鳥が独歩よりはるかに若かつたことによるのかも知れない。以後白鳥

は内村鑑三信徒のような体で、鑑三の後を慕う。白鳥は言う。「青年期の私に最も感銘の深かった内村の講演は、明治三十一年（私の二十歳の時）一月から、月曜日毎に神田の青年会館で開催された文学講演であった。私は早稲田近傍の下宿屋から其処まで、千里を遠しとせず通つて行った」とある。

反戦詩「寡婦の除夜」

世は日清戦争の勝利に湧いていた。すでに述べたように、鑑三もこの戦争に無関心ではいらなかった。戦争に関する文章もいくつか書いている。が、名古屋での教師生活の中で、以前この戦争を義戦として「日清戦争の義」（『国民之友』二三四号、一八九四・九・三）を書いたことを悔やむようになる。彼は「寡婦の除夜」（『福音新報』78号、一八九六・二・二五）という詩を書き、戦争で死んだ兵士の妻の心情を採り上げた。短いもので、以下に全文を引用する。

寡婦の除夜

月清し、星白し、
霜深し、夜寒し、
家貧し、友尠し、
歳尽て人帰らず、
思は走る西の海
涙は凍る威海湾
南の島に船出せし

恋しき人の迹ゆかし

人には春の晴衣

軍功の祝酒

我には仮りの侘住

独り手向る閨伽の水

我空ふして人は充つ

我衰へて国栄ふ

貞を冥土の夫に尽し

節を戦後の国に全ふす

月清し、星白し、

霜深し、夜寒し、

家貧し、友尠し、

歳尽きて人帰らず、

これは一種の反戦詩でなくして、何であろうか。どこか後年の日露戦争中に書かれた与謝野晶子の反戦詩「君死にたまふことなかれ」（『明星』一九〇四・九）に響くものすら感じる。鑑三はこの詩を『小憤慨録』の下巻に収録するに際し、「明治廿九年の歳末、軍人が戦勝に誇るを憤りて詠める」を副題に添えることになる。彼は日清戦争開戦時に、義戦論を唱えたことを深く悔悟するようになっていた。その思いが後の日露戦争に際して、非戦論を唱えるエネルギーとなるのだが、それは次章に譲る。

『萬朝報』英文主筆に

一八九七(明治三〇)年は、あわただしく明けた。彼の名古屋時代はわずか五ヶ月で終わる。新年の祝いの最中に、彼には新しい仕事となる『萬朝報』の英文主筆の話が持ち上がっていたのである。『萬朝報』は一八九二(明治二五)年十一月一日、都新聞を退社した黒岩涙香(周六)の手により、東京市京橋区弓町で創刊された新聞である。発行所名は「朝報社」である。黒岩涙香は日本におけるゴシップ報道の先駆者として知られるが、出身は高知県で、実兄には札幌農学校第一期生黒岩四方が進がいた。涙香が鑑三を知ったのは、恐らくこの兄を通してのことであつたらう。

当時新聞は日清戦争の報道もあつて、販売部数が伸びていた。涙香は不敬事件で名を高めた鑑三を招くことで、『萬朝報』の名をさらに高め、部数を伸ばそうとしたのである。この場合鑑三は、宣伝のまたとない人材と涙香はジャーナリスト感覚で察していた。六年ほど前の「不敬事件」は、鑑三を時の人とし、その名は全国的に報道され、知名度抜群であつたからだ。

入社交渉は、年明けから始まっていた。涙香は名古屋まで足を運んで入社を懇請する。鑑三も東京に用事で出かけると、京橋の朝報社に涙香を訪ねるなどして交渉を重ねた。鑑三は東京に帰りたくてたまらなかつた。名古屋英和学校の仕事は軌道に乗っていた。しかし、そこに骨を埋めることはできなかった。苦しかった京都時代のことを思うと、名古屋での生活は、経済的には一応は満足の行くものであつた。が、彼は一段の飛躍を願つた。東京の朝報社は、苦しめた京都時代を支えてくれた警醒社書店にも近い。彼は迷つたものの、朝報社勤務がベストであると次第に思うようになる。

一月二十三日、内村鑑三は上京し、翌二十四日(日)留岡幸助の牧会する靈南教会で説教をする。その折りに朝報社を訪れて社長涙香に会い、入社を承諾したのではないか。鑑三が名古屋英和学校を退職し、単身上京するのは、二月の中旬のことであつた。二月十三・十四日の『萬朝報』が「内村鑑三氏入社」の記事を載せている。鑑三は『萬朝報』の英文欄主筆として迎えられたのである。ジャーナリスト内村鑑三の誕生である。

朝報社入社当時の鑑三

入社当時の鑑三を、第一高等中学校時代の教え子で、共に英文欄を担当した山県五十雄は、後年、次のように書く¹⁰⁾。

内村先生は萬朝報の英文欄主筆として入社された、私も英文欄記者であつたから、毎日机を並べて働くことになつたが、大学の諸教授さえ馬鹿にしていた生意気な私は初のうちは先生に對しても余り敬意を持たなかつた、ところが毎日先生の行状を見、御話しを聞いているうちに、だんだん自分が如何に小ツぼけな如何に罪多い人間であるかが分かり出し、後にはまともに先生の御顔を見上げかねる程恥かしく感ずるようになった、これではならぬと私は反省し始めた、私は放縱の生活を捨てた、世を恨み人を呪う私の拗けた心は次第に平和となり世の中が明るくなつて来た、叱られたことも、警められたことも一度もない、然も先生の偉大な感化により私は全く更正した、かくして私の幸福な生活は始まつたのだ、あの危機に当り、神が内村先生を私に送り給はなかつたら恐らく私は身心共に更に悪化し、

天死若くは獄死を遂げたであろう、先生は私の魂の父である。

一八九七（明治三〇）年二月十三、四日の両日、『萬朝報』に「内村鑑三氏入社」の記事が出る。十三日は二面の冒頭に、十四日には同文が何と一面のトップに掲載された。中に「農学士内村鑑三氏は今回当社の請を諾し、来りて朝報の編集局に入れり、氏が社会の觀察家として、熱心なる批評家として、今日の思想界に如何の地位を独占せるやは欧米の英語圏とそれに準じる国々の人々世人の既に知る所ならん」の一節があるが、要を得た紹介であった。鑑三は『萬朝報』の英文欄主筆として華々しく就任したことになる。彼は日々一、二編の文章を、英語で書いて載せるようになる。彼の書いた英文の文章は、当時の日本人の目には、余り留まらなかつたようだが、彼は英文欄ばかりではなく、日本語による文章も「時勢の觀察」欄などに発表するようになる。

鑑三の英文による文章は、素直に正直に日本人の見解を述べるといふ点で拔群の特色を示していた。対象は無論日本人の英語を解する知識人、それに東京や大阪に居住する外国の特派員、さらには欧米の英語圏とそれに準じる国々の人々である。『萬朝報』は鑑三就任以後、外国特派員や日本に関心を持つ外国の読者からも強い関心を持たれるようになる。

右の山県五十雄は「内村先生の追憶」という文章の中で、鑑三の英文を「邦文と同じく先生の英文は流暢華麗とは言えない。先生の強い真実素朴な性格を反映して、ゴツゴツした、てらい気のない、しかし極めて expressive な名文である」とするが、当時の外国人はもとより、日本の知識人からの評判もよくなかつた。その英語に

は、外国人の英語という面が強かつたようだ。それだけに「時勢の觀察」に寄せた日本語による文章は、内村色が強く、しかも分かりやすいので『萬朝報』紙の読者に好まれたようである。「時勢の觀察」のタイトルは、前年八月『国民之友』三〇九号に寄せ、好評を博した時評のタイトルでもあつた。鑑三はそのことをも意識して、「時勢の觀察」欄で言いたいことを書き始めたのである。

居を東京に移した当初、鑑三は京橋区南鍋町の借家に住んだ。が、しばらくして靈南坂教会牧師留岡幸助の尽力で青山学院近くの二階建ての借家に移つた。当初は単身赴任であつた。妻のしづは、妊娠中で無理が利かなかつたためである。なお、長男祐之の誕生は、この年（一八九七）十一月十二日である。

『国民之友』への寄稿

京都時代の鑑三は、民友社の徳富蘇峰が刊行した『国民之友』（創刊一八八七年）に、しばしば寄稿のチャンスを与えられていた。例の田村直臣の『日本の花嫁』事件への日本基督教会が下した教職（牧師職）剥奪というきびしい判定に対し、鑑三は直ちに「豈惟り田村氏のみならんや」（第一五卷三三三号、一八九四・七・一三）を書き、田村の行き過ぎを認めながらも、日本基督教会が田村の「教職を剥奪したるをば正当の処置なりと信ずる能はず」と田村擁護とも言える一文を寄せたのは、すでにふれたように、その最初であつた。

そう言えば鑑三が『流鼠録』を連載したのも、『国民之友』（三三二―三三三号）であり、「日蓮上人を論ず」（三三四―三三七号）の連載も、『国民之友』であつた。「日清戦争の義」（三四四号）や「日清戦争の目的如何」（二七三号）のような時事評論、さらには「何故に大

文学は出ざる乎」(二五六号)、「如何にして大文学を得ん乎」(二六五(二六六号)など、文藝時評的なものまで含めると、文筆家、評論家としての鑑三の名は一気に、爆発的に広まることになる。その意味からすると、不遇時代に蘇峰に拾われ、書く舞台を提供されたことで、徳富蘇峰は鑑三の恩人となる。鑑三も後年しばしばそのことを言い、蘇峰を徳とした。

しかし、『国民之友』という雑誌は、蘇峰が平民主義から強硬な国権論者に転じるに及び、その不買運動さえ起こり、蘇峰の転向が批判されるまでになると、鑑三も蘇峰に距離を置くようになる。が、鑑三の鑑三たるところは、一度恩になった関係者とは、相手に非があるうと、決定的な別れはしないところにある。蘇峰との関係は、後年、『排日移民法案』反対をめぐって、『国民新聞』が、それに反対なのを知り、すぐ蘇峰に便りを出すところなどにも現れている。そのことは第十二章で触れることになる。

鑑三は『萬朝報』と『国民之友』を舞台に、マスコミ界の花形として活躍をはじめた。彼は警世の時事評論家であり、革新的リーダーとして世の注目を浴びる。彼の『萬朝報』に書く文章は、英文にしても、たまに書く日本語のものにしてもよく読まれた。彼は言いたい放題のことを主に英文で綴った。特に藩閥政府の攻撃は、佐幕派内村鑑三の真骨頂であった。この頃の鑑三を評して小原信は、「おそらく鑑三は、英文で書いたからこそ、第二、第三の不敬事件を起こさずにすんだのかもしれない。それほどマスコミを使つて、言いたい放題の放談をしつづけている。ただそれが英語であると、きびしいきわどいことも平気で言えたのであった」とする。確かにそういう面はあったろう。

藤澤音吉の来訪

ところで、藤澤音吉という鑑三後半の人生にかかわる重要な人物が、『萬朝報』の刊行許の朝報社を訪れ、鑑三に弟子入りを志願するのは、退社の年の春のことである。そのきっかけは、鑑三が『萬朝報』に日本語で寄せた、ごく短い文章にあった。その文章とは、鑑三が「人を作れ」の題で一八九八(明治三二)年二月三日に発表したものである。現在は『内村鑑三全集5』に収録されているので、簡単に読める。四〇〇字詰原稿用紙にして二枚弱のごく短いもので、人材を育てることは容易ではないことを主張したものであった。その中核となる主張は、以下の箇所である。引用する。

然り人を作れよ、そは一人一人を作るは憲法を作るよりも偉大なる事業なればなり、何人も憲法又は内閣を作るを得べし、然れども人物のみが人物を作り得るなり、憲法は酒食に耽りながらも作るを得べし、小説は妓楼に在るも作るを得べし、然れども人物製作は克己献身の業なり、見るべし君子国の志士仁人、憲法 小説を作る者多くして人物を作る者少きを。

この箇所を含む鑑三署名の文章を読んだ藤澤音吉は、当時長野県の故郷で車夫をしていた。彼は矢も盾もたまらず、車を引いて上京し、鑑三を朝報社に訪ね、「日本国の外務大臣たらんと志」を鑑三に告げ、入門を願い出る。鑑三はその一様でない熱心さにほだされ、翌日自宅に来るように言い、その願いを受け入れる。以後、彼は内村家の総支配人、番頭、車夫、そして伝道旅行などで留守をすることの多かった鑑三のため、守衛とも言える役割を鑑三の死の日

まで続ける。

なお、藤澤には、益本重雄との共著による『内村鑑三傳』（独立堂書房、一九三五・一二）がある。わたしはこの本を古書店で購入したが、大学図書館などでもなかなか巡り合えない本である。評伝部分を益本が藤澤音吉提供のエピソードなども交えて書き、藤澤は巻頭の鑑三関係の何枚もの珍しい写真の提供、それに巻末の「思い出」関係の原稿依頼を受け持ったようだ。藤澤はこのセクションに「家庭より見たる内村鑑三先生」の一文を寄せている。本書は本邦初の内村鑑三評伝としての栄誉を担うこととなる。

これまでも、しばしば本稿でも利用させてもらった政池仁の『内村鑑三伝 再増補改訂新版』には、この藤澤音吉という人物にインタビューして聞き取った話として、興味あることどもが記されている。

鑑三門下からは、第二次世界大戦後の日本の教育を担った文部大臣や東大総長、さらには最高裁長官などのエリート的人物ばかりでなく、奇特者とも言える下積みの人物が集まるという面があった。地位や金銭に遠くとも、誠実さの光る人物群像とも言えようか。この藤澤音吉ばかりか、その生涯に付添い、『二荊自叙伝』や『恩師言』という鑑三言行録を残した斎藤宗次郎、鑑三の北越学館時代の給仕で、不敬事件や女子独立学校事件の際に鑑三を助けた山岸壬五、晩年の芥川龍之介に鑑三のことを話した俳人室賀文武、宮沢賢治の小学校時代の担任照井真臣乳、日本で初めての基督教図書館を岡山県の津山に建てた森本慶三、さらにこの開館式にも鑑三と行動を共にした千葉県山武郡鳴浜村（現、千葉県山武郡九十九里町）の村長海保武松と挙げれば切りがない。彼らは皆鑑三に心底惚れ込み、鑑三の為

に尽くした。

鑑三もまた彼らの献身に応えることを忘れなかった。鑑三は彼らの労を十分認め、応分の謝礼を払ってその仕事をさせていたのである。以後の叙述でも、この方面の鑑三の側面にも、しっかり光を当てていくことにする。

三 『東京独立雑誌』の創刊と廃刊

言論界で大きく羽ばたく

『萬朝報』と『国民之友』を舞台に、内村鑑三はこの時期、マスコミ界の寵児として活躍をはじめた。彼は警世の時事評論家であり、革新的リーダーとして世の注目を浴びることになる。彼は言いたい放題のことを主に英文で綴った。特に藩閥政府の攻撃は、佐幕派内村鑑三の真骨頂であった。けれども、朝報社での主要な仕事である英文記事は、どうしても日本人の読者は限られる。彼は日本人に向けた記事が書きたかった。それには退社して、自らの雑誌を持たねばならぬ。彼は思い立つとすぐに実行に取りかかる。

鑑三が「退社の辞」を書いて朝報社を去るのは、一八九八（明治三十二年五月）二十一日のことであった。当日の『萬朝報』には黒岩涙香の「内村鑑三氏の退社を送る」が載った。翌日二十二日の『萬朝報』には鑑三の「退社の辞」が、二十三日の英文欄には鑑三を送ることは、Farewell to Mr. Uchimura が載る。退社の理由は、右の涙香の文章によると、「新聞記者の激務に堪えず、むしろ雑誌記者として静かに世に尽さん」とのことであるが、全力投球の新聞記者生活は、確かに彼の健康を脅かすものがあつたのであろう。ここに

来て鑑三は自らの新しい雑誌の刊行を思い立つ。

朝報社を辞める一か月前、鑑三は同じ英文欄担当の山県五十雄と、山県の兄にあたる山県悌三郎を訪ねる。山県悌三郎は教育者であり、日本最初の少年雑誌『少年園』(一八八八・五創刊、復刻版が不出版から出ている)の主権者であった。彼は弟から不敬事件でその名が知れ渡っていた内村鑑三のことを聞くに及んで、鑑三の目論む新雑誌『東京独立雑誌』に関心を示す。そして協力を約するに至る。若き内村鑑三には人を惹きつける何かが充満していた。それが二歳ほど年上であった山県悌三郎の助力を、引き出すことになる。

新しい雑誌の刊行

かくて『東京独立雑誌』は、一八九八(明治三二)年六月十日、第一号が刊行された。創刊号の表紙には、右側に「毎月二回発行／定価金五銭」、左側には「主筆内村鑑三／持主山県悌三郎」とある。なお、表紙上部三分の一には英語でTHE TOKYO DOKURITSU ZASSHI(THE TOKYO INDEPENDENT)と刷り込まれている。これに関して鈴木範久は、「当時、ニューヨークからTHE INDEPENDENTという雑誌が発行されていて、鑑三はこれを講読していたので、題名はそれにあやかっただけのものと思われる」とする。

創刊号に鑑三は「初言」と題し、「失望と奨励」「主義」「独立」「吾人の言責」「頭寒心熱」「出俗界」「何故に書く乎」「笑て肥れ」を、英文でOUR RAISON D'ETRE OUR PRINCIPLEを、さらに「政壇」と題し、「死活の岐」「俗事録」の二編の文章を載せる。いずれも無署名での発表である。「初言」は『東京独立雑誌』刊行の抱負を述べたもの。OUR RAISON D'ETRE と OUR PRINCIPLE は、

それを英文で記述したものと云える。「政壇」は、いま言う「政治時評」に通う。以後、鑑三は『東京独立雑誌』という自ら主宰する発表舞台を得、言論界で大きく羽ばたく。彼はこの雑誌の2号(一八九八・六・二五)からも、無署名で政治や社会問題に歯に衣着せぬ物言いでの文章を載せていく。創刊号には、他に札幌農学校時代の旧友大島正健の「日本語と朝鮮語との比較(白鳥庫吉氏の説を表す)」や鑑三の弟、内村達三郎の「楠木正成傳」なども載った。

創刊号は評判よく、いくつもの新聞・雑誌が取り上げることになる。刊行一週間後の六月十七日には、『萬朝報』と『福音新報』が同時に批評文を掲げた。まずは『萬朝報』の「よろづ文学」欄に載った『東京独立雑誌』の紹介を掲げよう。

内村鑑三氏主筆の『東京独立雑誌』予報の如く去十日初見(はつだ)さる、本領あり英文あり、政壇、学壇、史壇、実験録、科学短篇、俗事録あり、能く趣味と必要とを兼得たる者なり、総体の調子、簡潔にして沈痛、言々熱あり思想凡て社会の根本に対する深刻の不平より出で、警句紙面に満る所る直に主筆其人に接するの想あり、氏曾て吾社にあり「胆汁数滴」を草す、此誌亦社会に對する胆汁ならんか、兎に角、今の世に「あるを要する者なり。

次に『福音時報』に載ったものは、次のようなものであった。

内村氏萬朝報の英文欄に万丈の気炎を吐かれたりといへども、氏が邦文を以て縦横に社会を論評し、正義公道を扶植して、広く人心を啓発せられんことは世人と、もに久しく希望せし所

なり、故に余輩は満腔の同情を以て東京独立雑誌を福音新報の諸君に推薦せんと欲す。

第一号所載「死活の岐」は氏が彼の偏狭なる大和民族主義に對して打撃を下さんとする予告とも見るべきものか。「学壇」の大島氏の論文「史壇」の正成傳（内村達三郎氏）何れも杜撰孟浪の文字に非ず。

雑誌では『大陽』（4巻13号、一八九八・六・二〇）が、「論壇の風色」が革^{あらた}まらず。独り内村氏が独立雑誌のやゝ異彩あるを見るのみ」と評し、『早稲田文学』（7年10号、一八九八年七月四日）は、その創刊を以下のように報じている。

兼てより風評高かりし内村鑑三氏の『東京独立雑誌』は、去る六月十日に其の初号を發行せり、創立の際として雑誌としては種々欠点なきにあらねど、「初言」欄内を読まば十分内村氏の主義と抱負とを同ふに足るべし、英文の一欄頗る注目の価あり、内村達三郎氏の「楠木正成傳」はなくもかな、兎も角も一種の特色ある雑誌なり。

有島武郎と正宗白鳥の評

有島武郎は『東京独立雑誌』の創刊号以後の三冊を手にして、日記（一八九八・七・一五）に感想を記している。以下のような¹³。

東京独立雑誌ナルモノハ一ヶ月前内村鑑三氏主筆トシテ生マレ出デヌ。楚々タル小冊子ノミ。而カモ全文ヲ通読シ来ルト

キ一道ノ奇氣卒然トシテ人ヲ襲ヒ、卷ヲ閉チテ猶余音ノ何レニカ響クヲ覚フ。余ハ敢テ該雑誌ノ文章巧妙ナリトハ思ハズ。該雑誌ノ記事他人ノ道破セザリシ驚天動地ノコトナリトモ思ハズ。唯平静ノ筆ヲ馳セテ吾人ガ耳目ニセル処ヲ書シ、句節ノ間毫モ拍手快哉ヲ呼ブガ如キコトナキモ、読了シテ一種ノ influence ヲ感セザル能ハザルモノハ唯夫レ内村氏ガ万腔ノ熱心ト至大ナル同情トニ因スルカナ（原文は横書き）

確かに有島武郎も右の日記の一節で言うように、『東京独立雑誌』は外見は「楚々タル小冊子」であり、見るからに貧弱な雑誌であった。創刊号は本文二十ページ、定価は五錢である。

当時内村鑑三に心酔していた正宗白鳥は、この雑誌を「月二回の薄つべらな、見掛けのお粗末な雑誌」と回想し、続けて次のように書いている¹⁴。これも興味深いものなので、以下に引用しておく。

私の早稲田在学中の事で、私はこの雑誌は、はじめからしまひまで、完全に講読したのであつた。その時分には『国民之友』は廃刊されてゐた。『国民之友』は、整頓された総合雑誌で、政治批評を主とし、教育、実業、宗教、文学、その他社会の諸問題を取り扱ひ、寄稿家は各方面に渡つて、賑かで興味豊かな雑誌であつた。小説も、創作や翻訳の優秀なるものが絶えず掲載されてゐた。これに比べると「独立雑誌」は、見るから貧寒な個人雑誌で、誌面の大半は主筆の筆に成り、主筆の知人や部下の者が余白を埋めてゐると云つた程度のものであつた。しかし、主筆内村は、不敬事件以後、東京を退いて流浪の生涯を送

つた後、萬朝の記者として東京に住ひ、一年あまりの社会觀察と筆馴らしをしたので、自分の好みのまゝに、筆を執つての戦闘をはじめやうと意気込んでゐたのであらう。不敬事件以後の鬱憤を思ふ存分に晴らしたくなつたのであらう。講演や著書ではまどろこしいので、月に二三回発行の雑誌で連続的に意見発表をやりたくなつたのであらう。年齢から云つても、壮年期の元氣盛んな時であつた。

回想ながら的を射た批評である。『東京独立雑誌』は17号までは、山県梯三郎との共同刊行であつたが、18号からは山県の手を離れ、鑑三自身の経営(主筆兼持主)となる。読者が増え、山県の支援を受けなくともやっていけるようになったからである。が、社員の増加と共に運営をめぐつての問題も出始めていた。

『東京独立雑誌』は一九〇〇(明治三三)年七月五日刊行の72号で突如廃刊され、東京独立雑誌社は解散した。前年、内村は女子独立学校というキリスト教主義に立つ学校の校長を引き受けていたが、この学校の問題が原因で、佐伯好郎さへきよしろうら社員と対立したことが原因であつたとされる。

加藤トシと女子独立学校

女子独立学校というのは、自由民権運動家で北越学館の創始者の一人であつた、加藤勝弥の母、加藤トシ(とし子、俊子とも表記された)が経営していた学校である。加藤トシは、一八三九(天保九)年、新潟の生まれ。早く夫を失ひ、キリスト教に救いを見出し、一八八四(明治一七)年に受洗している。一八八九(明治二二)年に上京、

新宿角筈の地に女子独立学校を開校した。キリスト教主義に基づく学校で、生徒は経済的理由で進学できなかった女子が、働きながら学ぶのを目的に創設された。加藤トシと鑑三とは、生前から親しい交わりがあつた。が、トシは一八九九(明治三二)年六月二十三日に没した。『東京独立雑誌』の第三十六号(一八九九・七・五)に、鑑三の「友人加藤トシ子を弔ふ」の一文があり、現在、『内村鑑三全集7』に収録されている。短い文章ながら、加藤トシの生涯と事業とを的確に記しているので、左に全文を引用しよう。

友人加藤トシ子逝く、

彼女は歳五十にして志を起し、同胞女子の教育を企て、女子独立学校を起し、孜孜として此聖業に従事する茲に十有二年、病んで起つ能はざるに及んで素めて歇む、眠むるの前二週日、彼女の感覚未だ正確なるの時、余は彼女をその病褥に訪へり、談彼女の学校に及ぶや、彼女は病苦を忘れ、意気音声平日に異ならず、其後來を語り大に愛息勝弥氏並に余に囁する所ありき、余は未だ彼女が死病に犯されしを知らず、戯れに彼女に語て曰く、「我等神を信ずる者に取りては縦令死するも何かあらん、我等は彼の国に至て我等の事業を継続せんのみ」と、彼女は余に和して曰く、「嗚呼然り、実に然り、癒ゆるも働かんのみ、死するも働かんのみ」と、後彼女の病日々に革るや、常に家人に告げて曰く、我れ今より天国に行て働かんと欲す、汝等も地上に於て働くべし」と。日本婦人にして歳半百に達して快樂を意はず、其纖弱の腕を揮ふて世の改善進歩に従事す、真正に基督教を信ぜし者は実に此の如き者なり。

彼女^{ゆい}逝^いて彼女の事業は死せず、王城の西緑蔭深き所に一校舎の彼女の遺志として存するあり、是れ女子大学を目的として興りしものに非ず、亦資を海外に募りて成りし宗教学校にあらず、日本の女子問題は実に難問なり、而して一老嫗独り起て是に解積を与へんと試みたり、即ち労働と愛国心と基督教とに依りて日本婦人を救はんと試みたり、而して彼女は僅に其端緒を啓いて逝^ゆけり、吾人彼女と志を共にする者豈に彼女の事業を茲に中絶せしむべけんや。

鑑三は右の文章の最後に、「吾人彼女と志を共にする者豈に彼女の事業を茲に中絶せしむべけんや」と書いてあるが、加藤トシに後事を託され、女子独立学校を引き継ぐ決心を固めていたものと思われる。鑑三はトシの遺志を継ぎ、翌月七月には校長に就任した。だが、すでに再三見てきたところだが、鑑三は教育者としての資質には恵まれていたものの、教育という事業には生来向いていなかった。彼は理想を高く掲げ、教育に立ち向かうことができて、学校経営となると話はまた別なのである。その高い理想は、現実の諸問題の前にはもろくも崩れるのが常であった。北越学館の場合、大阪泰西学館の場合など然りである。

女子独立学校の校長に

鑑三が加藤トシから委ねられた女子独立学校は、その後幾變遷を経、角筭女学校、精華学園などと校名を変え、現在の東海大学付属望洋高等学校となるが、当時は東京府豊多摩郡角筭村にあった。一学年の生徒数三十〜四十人ほどの小さな学校である。最盛期でも三

学年で一五〇名ほどであった。鑑三は校長職に付くと、住居をこの学校内に移し、専心誠意学校運営にあたった。

鑑三の下で佐伯好郎がこの学校の教頭となるのは、一八九九(明治三二年)の秋、新学期からのことである。佐伯は一八七二(明治四年)八月一日、広島県廿日市^{はつかひ}の生まれ。東京専門学校(現、早稲田大学)英文科の出身。在学中イギリス聖公会の東京築地教会で受洗し、クリスチャンとなった。のち、アメリカ、次いでカナダに渡航、トロント大学で言語学を専攻し、英語・古典語の習得につとめ、一八九五(明治一八年)年に卒業し、帰国する。

帰国後、佐伯は東京専門学校および和仏法律学校(現・政法大学)などの英語科に非常勤講師として出講し、一八九七(明治三〇)年、高等師範学校(現・筑波大学)に招かれ、専任講師となった。一八九九(明治三二年)九月には同校を辞職し、かねてから尊敬していた内村鑑三が校長を務める独立女学校の教頭となる。同時に東京独立雑誌社の社員にもなっている。学校だけの収入では、生活の保証が少なかったため、文筆による収入を鑑三が配慮したのであろう。なお、この時、鑑三の弟、内村達三郎も同時に入社していた。しかし、佐伯は学校運営問題で鑑三と正面衝突し、一年後には独立女学校を退職、同時に東京独立雑誌社もやめてしまう。弟達三郎も、この時佐伯に従った。達三郎の鑑三への反逆は、ここに始まる。

佐伯好郎は当初内村鑑三崇拜の熱血漢として、女子独立学校の教頭に就任し、『東京独立雑誌』でも、当初は鑑三張りの文章で活躍した。が、彼は自意識過剰で激し易い人間であった。『聖書之研究』創刊号に、鑑三は「ガラス的人物」という文章を書いている。何人もの鑑三研究者がすでに指摘するように、ここでの「ガラス的人物」

とは、佐伯好郎を意識していると考えてよいので、参考までにその全文を紹介しよう。

人の怒は神の義を行はず（雅各書第一章廿節）

世に亦ガラス的人物なる者あり、透明にして又剛毅、豪直を以て世に称せらる、然れども彼れ破砕し易くして彼に接するは甚だ危険なり、吾人不幸にして少しく彼を傷くるあれば彼尖片を飛ばして吾人を傷くるや太だし、透明なるは愛すべし、然れども吾人は冷泉の清らかなるが如くならざるべからず、剛毅なるは貴むべし、然れども吾人は金剛石の如く五光を八方に放つものならざるべからず、激し易くして亦砕け易きものは低価なるガラスたるのみ。

生前の鑑三にも親しかった政池 仁は、『内村鑑三伝（再増補改訂新版）』¹⁶で、「佐伯がガラス的人物であるならば、内村もまたガラス的人物であった。独立雑誌の社員たちは内村の正義感に共鳴して内村とともに社会国家を責める事を快としたけれども彼らは内村の信仰と愛とを見ならわなかった」と言う。首肯できる評言である。

『東京独立雑誌』の廃刊

『東京独立雑誌』が、廃刊にまで進んでしまった刊行元の内紛とは何であったのか。鑑三に「独立雑誌の最後」¹⁷という一文がある。冒頭の部分を左に引用する。

独立雑誌社員は皆独想自信の人なり、彼等は正理と信ずれば

天下を敵として立つを辞せず、矧んや社長の言の如きに於てをや、余は深く余の神に感謝す、余の統轄の下に筆を執られし諸氏にして一人も余の弟子と成りし者のなかりし事を、余は諸氏の正直と勇胆とに敬服し、諸子が能く独立雑誌記者たるの資格を終りまで全うせられしを喜ぶ。

近頃余の女子独立学校に於ける或る公的行為にして社員諸氏の大に非難を表せられしものあり、故に余は止むを得ず、諸氏を以て余の判事となし、諸氏に乞ふに余の行為に対して公平に審判せられん事を以てせり、諸氏は悦んで此の乞を容れ、精議三日の後、諸氏の判決を余に示されたり、然るに余は不幸にして諸氏の此判決に服するを得ず、諸氏の勤勞を謝すると同時に之を諸氏に返上したりき。

鑑三は右の文章に、「余の女子独立学校に於ける或る公的行為にして社員諸氏の大に非難を表せられしものあり」と書くが、具体的には何のことかわからない、先の政池 仁は、「今日、これを公平に記している資料がないので真相はわからぬ」としながらも、「ある道徳的失敗をしかけたと内村が思った一人の女教師を即刻罷免してしまった」ことによるとする。なお、政池 仁は、ここで鑑三が「短気で怒り易かった」ことを言い、それが友人や弟子たちとのトラブルを生む原因になったことも指摘している。然もありませんことである。

ついでながら、この事件以降、鑑三と弟、達三郎とのかかわりは、次第に悪くなり、修復が利かないまでになる。当初達三郎は、鑑三を擁護したようであるが、鑑三のあまりに頑固な態度に嫌気が差し

たらしい。主筆鑑三と佐伯好郎・安孫子貞治郎・坂井義三郎・西川光次郎・中村諦梁らとの反目は、内村家の内紛をも伴って、長く尾を引くこととなる。何度も言うが、鑑三は教育者としての資質には恵まれていたが、職員掌握などを含めた現実の学校経営には、無力な面があった。今回もそれが馬脚を露したものとしたい。同じことは東京独立雑誌社という、小さな雑誌社の経営でも言えるのである。

四 『聖書之研究』の時代へ

東京独立雑誌社の解散

『東京独立雑誌』は、読者の支持を得て売れ行きも三千部を超え、財政的には問題はなかった。が、これまで見てきたように、鑑三が校長を勤める女子独立学校の問題をめぐっての内紛によって、終刊の憂き目を見ることになったのである。女子独立学校の問題は、『東京独立雑誌』の廃刊という事態を招く。雑誌は72号（一九〇〇・七・五）で廃刊され、東京独立雑誌社は、一九〇〇（明治三三）年七月十二日に解散している。

鑑三が主筆であったとはいえ、『東京独立雑誌』は個人誌ではなく、雑誌社の名の下に集まった何人も社員の共同執筆の雑誌であった。何事も共同事業には、トップに立つ人物の器量が大事だ。個性の強い連中をまとめていく指導力が求められるのである。が、鑑三には清濁併せ呑むという、いわゆる度量の広さは無い。彼は己の信じる道をひたすら歩むのであった。それが鑑三の長所でもあり、時に短所ともなるのであった。

『東京独立雑誌』という発表舞台は、多くの収穫を彼にもたらしたものの、同人雑誌的な面を多分にかかえた雑誌は、女子独立学校問題を契機に、廃刊の道を一気に滑りはじめた。この雑誌は、しよせん短命に終わる宿命を抱えていたのである。佐伯好郎らの反逆による『東京独立雑誌』の廃刊は、鑑三にとって大きな事件であった。またもや彼は試練に遭遇したのである。「余が非戦論者となりし由來」¹⁸で、鑑三は以下のように書いている。

私は三四年前に或る人達の激烈なる攻撃に遭ひました、其時或友人の勧告に従ひまして、私は我慢して無抵抗主義を取りました結果、私は大に心に平和を得、私の事業は其人達の攻撃に由り、差したる損害を被ることなく、夫れと同時に多くの新しい友人の起り来りて私を助けて呉れるのを実験しました、私は其時に争闘の如何に愚にして如何に醜きものであるかを浸々と実験しました、私は確かに信じて疑ひません、私が若し其時に怨を以て怨に報ひ、暴を以て暴に应じましたならば、多少の愉快を感じましたらふが、私の事業は全く廢れ、今の私は最も憐れな者であつたらふと思ひます、羅馬書十二章にある保羅の教訓を充分に覚りましたのも実に其時でありました、

「羅馬書十二章にある保羅の教訓」とは、キリスト者の生活原理と実践を説いたパウロの教えを指すのである。そのハイライトの箇所を『新共同訳聖書』（ローマの信徒への手紙）12・14〜20）で示すなら、以下のようである。

あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを1つにし、高ぶらず、自分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。出来れば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが復讐する』と主は言われる」と書いてあります。

鑑三は後年『羅馬書の研究』¹⁹というすぐれた一書を出す、その構想は『東京独立雑誌』の廃刊という厳しい事件を通して、次第に醸成されていたものであったかのようである。事件をあまり語らなかった背景には「ロマ書」に学んだ鑑三の「耐える人」の側面を見ることが出来る。

わたしは本論(内村鑑三闘いの軌跡)のサブタイトルに、「闘いの軌跡」ということばを付しているが、大事なのは、その「闘い」には「無抵抗主義」という闘いも含むことである。鑑三としては、『東京独立雑誌』に長期連載中の「興国史談」など、まだまだ書き続けたい連載ものもあった。雑誌にまず連載し、それに手を入れて本にするというのは、この頃の鑑三の確立した手法であったからだ。廃刊は、それを断念しなければならぬことを意味する。それは何としても無念なことであつたに違いない。ここに『聖書之研究』という個人雑誌が、新たに構想されることになる(なお、『興国史談』は、連載分に続きを加え、のち一冊に編纂され、一九〇〇(明治三三)年一〇月一日付で、警醒社書店から刊行されている)。

夏期講談会

その前に一九〇〇(明治三三)年七月二十五日から八月三日にかけての十日間、女子独立学校で行われた第一回夏期講談会にふれておかねばならぬ。この講談会は、もともとは東京独立雑誌社の企画であり、すでに雑誌の読者からは申込みを受けていた。参加希望者は百名を超えたとされるが、鑑三はその準備と運営を、友人や知人に応援してもらい、何とか開催することができた。初日の参加者は、七十六人であり、十日間の平均出席者も七十名を下らなかった。講師には札幌農学校時代からの友人で、共に白官邸と呼ばれた教会(今日の札幌独立キリスト教会の前身)建設に携わった大島正健をはじめ、他に松村介石・留岡幸助・加藤勝弥・住谷天来らが参加した。鑑三は毎日午前中に講演し、右の大島・留岡・松村らも折々講演に加わる。

第一回夏期講談会は、『東京独立雑誌』の廃刊というきびしい現実を乗り越え、曲がりなりにも開くことができ、結果は成功裏に終わった。この夏期懇談会は翌年の一九〇一(明治三四)年と翌々年の一九〇二(明治三五)年には、聖書研究社の主催で開かれている。文献で分かっているところでは、後年文学で名を上げる志賀直哉・小山内薫・それに有島武郎らが参加している。志賀直哉は第二回夏期講談会に出席、後年「内村鑑三先生の憶ひ出」²⁰に次のように記す。二、三の箇所を引用する。

角筈の内村先生の家は何かいふ小さい女学校の中にあつて、講習会(注、夏期講談会のこと)は休暇中のその校舎で開かれてゐた。広い部屋に四五十の人が円く坐つてゐる。内村先生

は単衣の着流しでその円の中の一人として坐つてゐられたが、その鋭い感じの顔はおくれて後から入つて行つた私にも直ぐそれと分つた。腕組みをして、黙つてゐられる。晩のその会は感話の会で、交る／＼聴講生が自分の感じた事を発表するのである。

私は此夏の講習会から七年余り先生に接して来た。不肖の弟子で、先生にとつて最大事である教の事は余り身につけず、自分は自分なりに小説作家の道へ進んで来たが、正しきものを憧れ、不正虚偽を憎む気持を先生によつてひき出された事は実にありがたい事を感じている。又、二十前後の最も誘惑の多い時代を鶴呑みにしろ、教によつて大過なかつた事はキリスト教のお陰といつても差支へないだらう。

其頃先生の所へ集つた連中は一高の生徒で、小山内薫、倉橋惣三、岩波茂雄、西澤勇志、智の諸君、それから後ちに泥炭の中から出た蓮の実に花を咲かせた事で名高い理学博士の大賀君、独学で工学博士になつた芝浦製作所の田中君、法学士で今も伝道の仕事をしてゐる淺野君、富山県の農学校の校長になつた小野君、その他名は忘れたが色々な人があつた。古本屋をしてゐる人で、夏冬通じて決して帽子を被らなかつた人もあつた。それから矢張り一高で豪傑肌の人で大河平君もあつた。京都大学の天野貞祐君や落合太郎君は私の行つてゐた七年間で、最後の二年頃に来た人達だつたやうに思ふ。学習院出身では私の紹介で岩倉道俱、黒木三次が来るやうになつた。長与善郎、高木八尺君な

どはそのまた後で、私とは同時代の事はなかつた。飛入りでは山室軍平さんと有島武郎さんなども時々来てゐた。

有島武郎は右の志賀直哉の回想に見られるように、当初は「時々」きり角筈へ行くことは出来なかつた。当時、彼は札幌農学校の学生であつた。それゆゑ夏休みをはじめとする休暇以外には、鑑三の下に通う希望はあつても、常時は通うことは出来なかつたのである。しかし、彼は先に述べたように『東京独立雑誌』の愛読者であり、札幌農学校の先輩内村鑑三には、並々ならぬ関心を懐いてゐた。

そういうこともあつて、休暇で東京の家に帰ると、鑑三の集會には時々通うようになつてゐた。彼は一九〇二(明治三五)の第三期夏期講談会に出席してゐる。有島武郎は薩摩藩出身の官僚有島武の長男として東京の小石川に生まれた。父の横浜税関長就任を機に一家は横浜に移り、武郎は横浜英和学校(現、横浜英和学院)に通ひ、のち学習院を経て、農学者を志して札幌農学校に進学した。

一九〇一(明治三四)年、札幌農学校を卒業した彼は一年志願兵として麻布歩兵第三聯隊に入營、除隊後の一九〇二(明治三五)年渡米し、ペンシルベニア州フィラデルフィア郊外のハバフォード大学大学院、さらにハーバード大学で歴史と経済学を学んだ。帰国後、志賀直哉や武者小路実篤らとともに同人雑誌『白樺』に参加することになるが、若き日、鑑三から受けた影響には計り知れないものがあった。それは初期の『聖書之研究』に寄せた文章にも見出すことができる。有島武郎は『聖書之研究』第14号から16号(一九〇一・一〇～一二)の三回にわたつて、「札幌独立教会」の一文を寄せてゐる。

入隊直前の文章である。これは現在札幌独立教会や札幌農学校を知
るのに貴重な資料となっている。

『聖書之研究』の創刊

本題に戻る。内村鑑三を語る時、落とせない雑誌『聖書之研究』
は、一九〇〇(明治三三)年九月三十日に創刊された。雑誌全巻は
現在復刻版もあるが、原本は今井館資料館や国際基督教大学図書館
などが保存している。創刊号の表紙を見ると、上段に英語で THE
BIBLICAL STUDY と記され、その下にはラテン語で, *Pro*
Christo et Patria と記される。さらに左横書きで、「キリストの為
め国の為め」とある。以後この雑誌は鑑三と共にあり、その死に至
るまで続く。

なお、創刊号の奥付には、「明治三十三年九月三十日発行『編輯
人内村鑑三、発行人山岸壬五』とある。この山岸壬五については、
すでに「第五章 不敬事件」である程度触れているが、当時内村家
で書生扱いの待遇で住み込んでいた人物である。もともとは鑑三の
北越学館教頭職時代の給仕であった。山岸は押し寄せる右翼系学生
との対応その他を、当時、病気で寝こんでいた鑑三に代わって行っ
たりした。その後も山岸は鑑三に付添い、『聖書之研究』創刊の際
には、編輯雑務を担当し、会計事務もこなしした。山岸は事務能力抜
群の誠実な人間であった。奥付の「発行人山岸壬五」の刷り込みは、
伊達ではなく、山岸の協力に鑑三が応えたものなのである。

山岸は鑑三に先立ち、一九二九(昭和四)年三月に「越後栃尾の宅」
で死ぬ。そのことを知った鑑三は、同年三月五日の日記に、山岸は
自分の「人生の同伴者」であったと回想し、「第一高等学校不敬事

件の時に自分の傍らにありて自分と患苦を共にして呉れ、其他幾回
となく自分と苦楽を頌つた」とか、『聖書之研究』が世を益せしな
らば、其功労の大なる分前は山岸壬五に属すべきものである」とま
で書き付けている。山岸の葬儀に關しては、第十二章で詳説する。

創刊号の内容は、「感話」にはじまり、連載の「講話 聖書の話(第
一回)」、それに「説教」「雑感」欄には、「東京独立雑誌廃刊の真因」
と「誤解と疑察」の二編、さらに「研究」欄に連載の「創世記第一
章―第八章」などが続く。創刊号の八十ページ中、五十ページを鑑
三が書いている。他の寄稿者には、田村直臣・住谷逸人・吉野臥城
らの名を見出す。定価は五十銭であった。以後鑑三の死に至るまで
の三十年間、『聖書之研究』は休刊が八回あるものの、鑑三の主要
発表舞台として、自ら言う「紙上の教会」の役割を果たして行くの
である。創刊号の三〇〇〇部は完売して、再版を出している。同年
十月六日付で札幌の宮部金吾宛に出した英文書簡の一節には、「The
3000 copies of the first number of The Biblical Study is nearly out,
— a splendid success. Hope it may grow to be a powerful magazine.
『聖書之研究』創刊号はすでに三千部を売り尽くしました―すばらしい成功で
す。有力な雑誌に発展せんことを願っています。」とある。

今でもそうだが、物書きを自称する人の中には、依頼がないと書
けない、書かないという人もいるが、鑑三はそうではなかった。散
歩の途中でも、想が湧くと急いで帰宅し、ペンを執った。英文でも
和文でも彼は筆が速かった。途中からは、藤井武や畔上賢造や塚本
虎二ら優秀な助手が、その講演や講義を筆録し、補筆して文章化し
た。そうした経過を取る中で『聖書之研究』は、鑑三の言う「紙上
の教会」の役割を果たすことにもなる。「紙上の教会」とは、赤江

達也の要を得たことばを借りるなら、「教会のない者たちの教会であること、それは雑誌メディアによって媒介された読者⇨信徒のネットワーク」²¹なのである。

最盛期の発行部数は、数千冊にも及んだという。ここに思想家としての〈内村鑑三の『聖書之研究』の時代〉とも言つてよい時期が訪れる。別言するなら、内村鑑三の本格的なキリスト教伝道と、在野の思想家としての舞台が、しつかりと整えられたとしてよい。なお、鑑三は翌年一九〇一（明治三四）年三月十四日付で、『聖書之研究』と並行し、短い期間（1年六ヶ月）ながら、雑誌『無教会』を刊行することになる。

『東京独立雑誌』もそれなりの意味をもって存在したが、それは短命に終わった。しかし『聖書之研究』は、各地にこの雑誌の読書会が誕生するということもあって、やがて近代日本の思想界において、無視出来ない雑誌としての位置を得る。そこで以後、本論も以後、雑誌『聖書之研究』の歴史を常に検討するかたちで、展開することになる。

鑑三の研究の立場

内村鑑三は長年の思いを込めた雑誌『聖書之研究』を、前述のように、一九〇〇（明治三三）年九月三十日（創刊号の表紙および奥付による。実際に市場に出回ったのは、一〇月三日以降と思われる）に刊行する。表紙には「毎月一回発行、主幹内村鑑三」とあるほかに、「基督の爲め国のため」と記すところが、いかにも鑑三らしい。創刊号には鑑三のほか、執筆者には前述のように田村直臣など二、三の人々の名も見出せるが、基本的には鑑三の個人雑誌であった。鑑三の目指

したのは、あくまで伝道・聖書研究のための雑誌である。最も重視された面は、「研究」と題された内村セクションで、創刊号では「創世記第一章第一節」と「馬可伝第一章一より九」が取り上げられている。その研究の立場は、聖書研究を特殊化せず、平民の誰もが読み込むことのできるテキストとするところにある。鑑三は神学校での聖書研究や大伽藍で庶民を圧倒するかのような、既成教会とそこに君臨する牧師とを暗に厳しく批判する。

ところで、鑑三に「平民の書としての聖書」という文章が二つある。双方ともごく短い短章とでも言つてよいものだ。紹介しよう。

①平民の書としての聖書『新希望』六四号、一九〇五・六・一〇
 聖書を教会の書と解して其興味は全く失するなり、聖書は神の書にして平民の書なり、或る意味に於てはダンテの詩集、カーライルの論文の如き者なり、即ち農夫に由て茅屋に読まれ、商人に由て店頭ひもとに繙かるべき書なり、聖書は神が直接に人類に賜ひし書なり、先づ之を僧侶に授け給ひて、彼等をして之を平民に伝へしめ給ひし書に非ず、我儕神の子たる者は之に接するに天然に接するが如き自由を以てし、臆することなく、懼る、ことなく、「我が書」として之を読み、其光に浴すべきなり。

②平民の書としての聖書『聖書之研究』一六四号、一九一四・三・一〇

聖書はキリストの書なり、而してキリストは平民なりし、故に聖書は平民の書なり、聖書は平民が大平民に就て平民のため

に記^かきし書なり、然るに僧侶階級なる者起りて聖書を平民の手より奪ひ、之に自己に便利なる註解を加へ、之を以て平民の上に強ひんと成せしが故に、ルーテル、カルビンの如き大改革者起りて、聖書を僧侶(教会)の手より取戻し、之を其正当の持主なる平民に渡したり、

①はその全文、②はその前半である。ここで鑑三の言わんとすることは、聖書を一部の「僧侶(教会)の手より取戻し、之を其正当の持主なる平民」に渡す必要性の強調である。なお、近年の内村鑑三論の収獲の1つとしてよい柴田真希都の『明治知識人としての内村鑑三—その批判精神と普遍主義の展開』²⁾は、こうした鑑三の見解に触れ、「聖書解釈が特権階級に独占されていた時代は終わり、今や『聖書』が誰でも真に対峙できるテキストとなったことを強調している」とのコメントを添える。雑誌『聖書之研究』の登場は、ルーテルやカルヴァンの宗教改革の日本版を宣言するものでもあった。

注(1) 内村鑑三「大阪講演の要点 第三夜 余はいかにしてキリスト信徒となり

しか」『聖書之研究』82号、一九〇六年一月一八日。「内村鑑三全集14」三八六～三八七ページ

(2) 小原信「内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造」PHP文庫、PHP研究所、一九九七年六月一六日

(3) 松沢弘陽「解題」『内村鑑三全集3』三〇六ページ

(4) 『国木田獨歩全集』第七卷、学習研究社、一九六五年六月三〇日。四六五ページ

(5) 鈴木範久「内村鑑三日録1892～1896 後世へ残すもの」教文館、一

九九三年九月二五日。一九八ページ

(6) 内村鑑三ベルへの手紙、山本泰次郎訳「内村鑑三日記書簡全集5」教文館、一九六四年七月三〇日。三一九～三二〇ページ

(7) 磯佳和「伝記考証若き日の正宗白鳥」三弥井書店、一九九八年九月一五日。二六八～二八〇ページ

(8) 正宗白鳥「内村鑑三—如何に生くべきか」初出は『社会』一九四九年

四月一日、五月一日(第四卷第四号、第五号、および『早稲田文学』一九四九年六月一日、七月一日(第一六卷三号、第四号、のち『内村鑑三』細川書店、一九四九年七月二日収録。『正宗白鳥全集』第二十五巻収録。福武書店、一九八四年六月三〇日。二二六ページ

(9) 注8に同じ。二二〇ページ

(10) 山県五十雄「内村先生の思い出」『聖書知識』二七九号、一九五三年七月一日

(11) 山県五十雄「内村先生の追憶」『独立』一五号、一九五〇年五月一日

(12) 注2に同じ。二五四ページ

(13) 鈴木範久「内村鑑三」岩波書店(岩波新書)、一九八四年二月二〇日。八九～九〇ページ

(14) 有島武郎「観想録(日記)」『有島武郎全集』第十巻収録、筑摩書房、一九八一年一〇月三〇日。一〇一～一〇二ページ

(15) 注8に同じ。二〇九～二六一ページ

(16) 政池仁「内村鑑三伝(増補改訂新版)」教文館、一九七七年一〇月三〇日。三〇六～三〇七ページ

(17) 内村鑑三「独立雑誌の最後」『東京独立雑誌』七二号、一九〇〇年七月五日。「内村鑑三全集8」収録。二六五～二六六ページ

(18) 内村鑑三「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』五六号、一九

○四年九月二二日。『内村鑑三全集12』収録。四三三～四二六ページ

(19) 内村鑑三『羅馬書の研究』一九二四(大正一三)年九月十日発行。

奥付によると、発行者は古賀合名会社古賀貞周、取次所は向山堂書房と聖書研究社が並記されている。A5判、四隅と背は皮製、題字は金文字を箔押し、本文七二二ページ。定価は五円五拾銭。本文第一ページに「羅馬書の研究 内村鑑三講述／畔上賢造編纂」とあるように、本書は鑑三が東京大手町の衛生会館(大日本私立衛生会講堂)で講義したものを門下生の畔上が記録したことがわかる。題箋裏に「余と同時にキリストを信じ、一生涯を通して／信仰を共にし来れる、同校同級同室の友なる、北海道大学教授理学博士／ドクトル宮部金吾君に／旧友の滄^からざる愛を以て此書を献ず」との著者の献辞

が記されている。なお、『羅馬書の研究』については、第十一章で詳説する。

(20) 志賀直哉「内村鑑三先生の憶ひ出」『婦人公論』一九四二年三月一日。

のち『志賀直哉全集』第七巻、一九七四年一月一八日収録。二七九ページ

(21) 赤江達也『紙上の教会』と日本近代無教会キリスト教の歴史社会学』岩

波書店、二〇一三年六月二六日。九五ページ

(22) 柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三 その批判精神と普遍主義の展

開』みすず書房。二〇一六年九月二四日

受領日 二〇二二年三月二二日

受理日 二〇二二年六月 九日

